

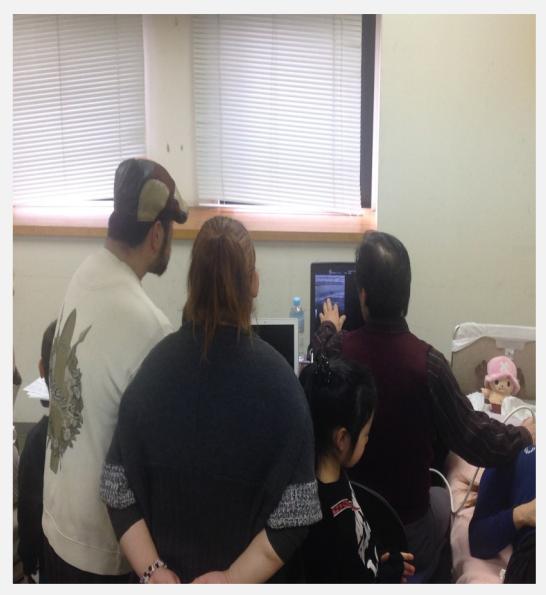
# いづみ

2015年春 特別編集号

題字 丹治正雄氏

## 子育て真っ最中のママさんたちとともに、甲状腺検査

宮城県柴田郡柴田町での甲状腺検査 2015年3月8日



わが子の検査に立ち会うママ茶くらぶのメンバー

私たち「いづみ」は、2014年夏から、宮城県内の各地で子どもの甲状腺検査を行ってきました。同年8月と12月には宮城県南部の白石市で、10月には同じ県南の角田市で行っています。

角田市での検査のときには、近隣の柴田町からも何人か検査を受けに来っていました。その中のひとりのお母さんが、後日「いづみ」を訪れ、「柴田町でも甲状腺検査をやってほしい」と依頼していました。柴田町も角田市同様、宮城県南部にあり、放射能汚染による子どもたちの健康被害が気がかりな地域です。

そのお母さんは、柴田町内で仲間と「ママ茶くらぶ」というグループをつくりており、放射能による健康被害の不安について、日頃から話題にしていました。ただ、自分たちの不安や悩みを解決するための具体的な糸口が見出せないでいたのですが、角田市で私たちに出会い、その活動を知り、「いづみ」を必要としてくれたのです。

さっそく、2月12日、「ママ茶くらぶ」の主催で、山崎先生の健康相談会を行いました。

そして3月8日に、柴田町の「ふるさと文化伝承館」で甲状腺検査を行いました。「ママ茶くらぶ」のメンバーが、町の広報課にはたらきかけ、この検査のことを広報紙で知らせた結果、翌日から検査申込みの電話が鳴りっぱなしでした。検査の定員の50名は、たちまちいっぱいになり、次回の検査まで待つてもらうことになった方も多数いました。社会運動や市民活動の経験がなかったママさんたちが、子どもたちを守りたいという想いから、放射能の問題に関心をもち、自分たちで行動を起こし、私たちだけではなく、役所の人や報道関係者をも動かしたのです（3月14日付『河北新報』の記事をご参照ください）。そして、3月8日の柴田町での甲状腺検査でも明らかになったように、事故から4年が経った現在も、子どもに甲状腺検査を受けさせたいと願っている親たちの数は絶えません。「いづみ」のこのはたらきは、更に広く知られる必要がありますし、長く続けられなければなりません。その為にも皆様の継続的なご支援が必要です。

2015年(平成27年)3月14日(土曜日) みやぎ

### 母ら依頼 甲状腺検査

柴田・仙台のキリスト教系団体に依頼

小中学生ら50人が参加

東京電力福島第一原発事故による子どもたちへの影響を調べる甲状腺エコー検査が8日、柴田町であった。

母親団体が「日本キリスト教団東北教区放射能問題支援対策室いづみ(仙台市)に依頼し、同窓会(の有無などを調べた。

事前に予約した同町や岩沼市、角田市の小中学生ら約50人が参加。検査は仙台市の小児科医大塚純一さんが担当し、首に超音波機器を当てて囊胞(うぶく)の有無などを調べた。

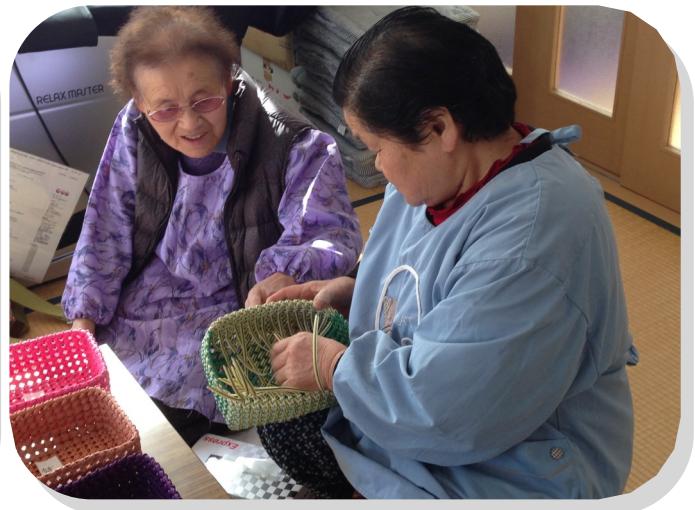
検査は柴田町の子育て中の母親でつくる「ママ茶くらぶ」が依頼した。代表の小林桜子さん(36)の6~17歳の子ども3人も検査を受け、異常はなかったという。

小林さんは「検査結果を

# クラフトテープと古着の布がひとつに

～原発事故避難者と津波災害避難者との交流が実現～

私たちは、原発事故によって故郷から離れ、仮設住宅で過ごしている人たちとの接触を試み、彼らがどんな不安を抱えていて、どんな支援を必要としているのか、知ろうとしてきました。そんな活動のなかで、村内全域が警戒区域又は計画的避難区域に指定されたため全村民が村外に避難している葛尾村の人たちと、福島県田村郡三春町の仮設住宅で交流をもつことができました。原発事故から3年が経過しようとしていました。予想より長くなっている仮設住宅での暮らしは、避難している人たちに健康面で少なからず影響を与えている様子で、「睡眠薬がないと眠れない」という人がたくさんいました。葛尾村に居た頃は、農作業に携わることで身体も動かし精神的にも充足していたのですが、仮設住宅での暮らしでは、それがなくなってしまったからです。しかし、やがて「なにもしないではいられない」という女性たちは、様々な素材を用いて手作業でのモノづくりを始めました。私たちが訪問したとき、クラフトテープでつくった籠が集会所に並べてありました。私たちは、この籠を外部に持ち出して、展示販売できないだろうか？また、そのことを通して、葛尾村の人たちのことを多くの人たちに知ってもらえないだろうか、と思いました



幸い、去年の夏、彼女たちの作った籠を仙台市内にある「いづみ」に運んできて、カタログ作りをしているところに、練馬バプティスト教会の入江玲子先生がいらして、その籠に興味を示され、教会のバザーで扱いたいと、3分の1の籠をもっていってくれました。また、秋には「あいコープみやぎ」の催事にも展示されました。そのとき、会場を訪れた、津波被災者で仙台市若林区卸町の仮設住宅に住み、そこで「手作りクラブ」というモノづくりサークルの代表をしている、齋藤志津子さん(左の写真、男性の左隣の女性)の目に留まり、自分たちが手掛けている古着の布を素材にした巾着との合作を提案してくれたのでした。折しも、2015年3月14日から、仙台市で国連国際防災会議が開催されることになっていました。葛尾村の女性たちは、作品をそこに出品する、という目標をかけ、初めての「注文仕事」を請け負い、冬の間に籠を完成させ、そのあと籠は仙台の「手作りクラブ」の工房(仮設住宅の集会所)に運ばれ、そこで巾着が縫いつけられたのです。防災会議の開催日に間に合い、仙台市内の商業施設で同時開催された展示会に葛尾村の女性たちと仙台の卸町の避難者との合作作品が展示されました。3月15日、私たちは、今回この籠づくりのプロジェクトに携わってくれた女性たちを仙台市に招き、自分たちの作品が巾着として展示されているところを見てもらいました。ある女性は、展示されている自分の作品を見て、「うれしい！ありがとう！」と、感激のあまり涙を流していました。私たちが、葛尾村からの避難者と始めて会ったとき、「支援の物資は十分いただいている。もし協力してもらえるなら、よその仮設住宅に住んでいるひとたちが、自分たちの作ったものをどんなふうに展開をしているのかを教えてほしい」と頼まれました。偶然ではありますが、「あいコープみやぎ」の鈴木さんのおかげで、クラフトテープの籠が「手作りクラブ」の齋藤さんの目に留まり、その結果、お互いの交流が生まれ、それぞれの作った「部分」がひとつの制作物となったことを大きな成果だと思っています。「放射能問題支援対策室いづみ」は、原発事故によって奪われた日常の光景や人びとの喜びを、かたちは違えども、何らかの形で回復させていくことも自らの課題として持ち続けていくことが大切と考えています。

\*いづみの活動にたくさんのご支援を頂き心から感謝申し上げます。日本基督教団東日本大震災救援募金「いづみ」への指定献金は5号にてお知らせします。

## 日本基督教団東北教区放射能問題支援対策室いづみ

〒980-0012 仙台市青葉区錦町1丁目13-6 ☎/FAX 022-796-5272 e-mail izumi@tohoku.uccj.jp

**「いづみの会」にご入会下さい！ 放射能による人々の不安に寄り添う活動を続けるために皆様のご支援が必要です。いづみの会にご入会ください。年会費は正会員3000円、賛助会員1000円、団体正会員5000円、いずれも一口です。専用振込用紙にてお申し込みください。**